京都精神保健福祉士協会

きょうと通信

NO. 24

2004 年 2 月

事務局:医療法人髙木神経科医院デイケアおいけ内
〒604-0845 京都市中京区烏丸通御池上ル都ビル 2 階
TEL075(222)0452　FAX075(222)1052
e-mail　kyo-psw@mbox.kyoto-inet.or.jp

12月例会報告

日　時	２００３年１２月６日（土）１５時～２０時	
会　場	天橋立　　仁風荘	
テーマ	第一部　地域生活支援センターの今とこれから	
	第二部　懇親会	
講　師	なごやかサロン	藤井　弘　　氏
	アンサンブル	高谷　恵子　氏
	ふきのとう	志水　正高　氏
	ほのぼの屋	石東　陽子　氏
	西京地域生活支援センター	中瀬　慶子　氏
参加者	第一部　　２７　名	
	第二部　　２２　名	

12月例会は、年に一度の北部例会として、一昨年にも利用した仁風荘を会場とし、開催されました。

今回は、京都の地域生活支援センターについて、シンポジウム形式で学習しました。現場で実践に取り組んでおられる5名を講師としてお迎えし、各センターの取り組みや、「現在、精神保健福祉士として感じていること・悩んでいること」等について話題提供していただきました。また、地域生活支援センターの意義や今後の展望についての意見交流を持ちました。

学習会の後は第二部として、懇親会をもち、冬の味覚のブリとカニのお鍋を囲んで楽しみました。

＜シンポジウム＞

1. **地域生活支援センター　なごやかサロン　　藤井　弘　さん**

なごやかサロンでは、利用者への食事提供サービスが業務の中心である。平日の夕食と土日祝の昼食を提供しており、昼間の居場所がほしいというニーズにこたえていくことが課題である。

精神保健福祉士として感じているのは、「地域から地域へ」の理念を実現していきたいということ。これは、「施設から地域へ」と、当事者は生活の幅を広げたが、施設と自宅との往復で完結してしまう生活にとどまるのではとの思いからである。

「地域から地域へ」を実現するためには、①緊急入院以外も含めた、夜間・休日の対応　②地域で支えるためのアウトリーチ（訪問）的な活動　③人的資源の充実　この三つが必要ではないだろうか。特に、③については、PSW個人としての自己実現・成長と、施設自体の成長とが両立していくために、同一施設内での煮つまりを避けるためにも施設間での相互乗り入れ（異動）が可能になれば、と思う。

2. **地域生活支援センター　アンサンブル　　高谷　恵子　さん**

アンサンブルは、通所授産施設カメリアの併設施設として開所した。食事提供や、生活相談、レクリエーション、訪問活動に取り組んでいる。

長岡京市で定期的に開催される3障害合同のケアマネジメント会議にも積極的に出席し、地域での障害者福祉のネットワークを構築している。ボランティアが活発であること、行政が熱心であるという地域特性は、支援センターの運営上、大きな強みである。利用者数や利用時間は、スタッフへの評価の反映であると自覚し、ニーズを尊

重した深いかかわりを継続していきたいと考えている。

3. **地域生活支援センター　ふきのとう　　志水　正高　さん**

ふきのとうを運営するふくちやま福祉会は、知的障害者対象と精神障害者対象の5つの施設を運営している。活動内容としては、電話や面接による相談や週1回の利用者宅の訪問、憩いの場の提供、毎月の行事予定や地域情報を書いたニュースの発行を行っている。また、福祉サービスなどの情報提供と仲介、通院への同行、併設の授産施設と連携した就労支援にも取り組んでいる。その他、地域交流（喫茶店、手話や陶芸教室などの講座）や啓発活動（講演会、まつり）も行っている。

今後は、サテライトの設置、中年層を対象にしたグループホームの設置、配食サービス等の実践を提案し、実現に向けて努力していきたいと考えている。

4. **地域生活支援センター　ほのぼの屋　　石束　陽子　さん**

舞鶴地域は、国立病院や保健所があり、保健所の相談員を中心に早い時期から福祉と医療のネットワークづくりをすすめてきた。1977年には、まいづる共同作業所が開所し、制度改正ごとに社会資源が増え、その流れの中で2002年4月に地域生活支援センターが開所した。

授産施設と併設しているが、センターとの機能分化を図っている。また、ヘルパー派遣も行っている。利用者がヘルパーに依存し過ぎないように留意し、日常生活に即した柔軟な対応をするように心がけている。

ほのぼの屋が事務局になり、舞鶴市精神保健福祉ネットワーク会議を開き、地域での支援体制整備づくりをすすめている。

ほのぼの屋は、無認可の共同作業所を基盤としていて、今後も柔軟さと支援センターだからできる事を大切にし、制度の狭間にある人たちを地域のネットワークの中で支えていきたい。

5. **西京地域生活支援センター　　中瀬　慶子　さん**

西京区では、保健・医療・福祉の関係機関が中心となり、「心の病を持つ人が地域で安心して暮らせるようにする会」が1997年に結成された。その翌年、2ヶ所に共同作業所が設立される。西京地域生活支援センターは作業所に併設して2002年に開設する。作業所・デイケア等に通いながら利用している人も多く、他センターとのはしごをしている人もいる。日中の活動の場所となっている機関との連携、支援センター間の連携が必要である。

主な活動は　①相談　②日常生活支援　③地域交流活動　④その他レクリエーション等。また、様々な行事を催し、地域の皆が交流できる場となることを目指している。

今後、地域生活支援センターは、幅広い支援と他機関との連携を通じて、地域のコーディネータ的役割が期待される。そして、反面、施設内自己完結や施設づけになっていかないための工夫が課題であろう。

＜**質疑応答**＞

Q：ふれあい交流サロンと地域生活支援センターとの関係はどのようなものか。

A：（藤井さん）ふれあい交流サロンは、京都市の独自事業で精神に障害のある方と市民が気軽に交流できる場が必要とのことから、2000年に初めて南区に開設され現在市内に6ヶ所開設されている。設置主体は京都市であり運営を地域の精神保健福祉に関わる関係者で結成された実行委員会に委託している。一方、地域生活支援センターは精神保健福祉法に基づく社会復帰施設の一つである。ふれあい交流サロンと支援センターを併せて利用している当事者もいる。

Q：地域生活支援センターの方向性について
①当事者の活動の場を広げていくのにどのような方法をとっているのか？
②身体・知的・精神の3障害の連携はどうか？

A：（藤井さん）①なごやかサロンでは、月に一度、当事者会が開催され、日常生活や体験談などが話し合われている。また、京都には4つの当事者グループの集まりとして、京都ユーザーネットワークがあり、学習会、講演会などの活動を行なっている。
（藤井さん）②たとえばなごやかサロンの場合、近くにある知的障害者の作業所の利用者も食事に来られる。登録されている方もあり、利用については必要に応じて対応している。精神障害についての理解を求めることが難しい面もあり、身体など他障害の方も含めた当事者同士の交流という点では課題もある。また、3障害とは別に、当事者の親御さんが高齢の場合、老人福祉や関連施設とのかかわりも必要となってきている。

＜**意見**＞

- 各支援センターが、地域性を生かし、ニーズに即したさまざまな支援活動を行なっている。

・ 医療機関をはじめとする関係機関との連携は欠かせないが、課題は多い。
・ どの機関・施設でも適応が困難とされている利用者への対応は、(医療機関や授産施設に併設の支援センターに比べ)単独の支援センターだと解決のつかないことが多く、悩んでいる。反面、支援センターだからこそ、そんな人の支えになるべきであるとも思う。
・ 地域でのネットワーク会議を京都市内でも、長岡京市や舞鶴市のように展開していきたい。
・ 支援センターの精神保健福祉士として、利用者のニーズをきちんと捉えることが必要である。

＜懇親会＞

22名参加し、宮津湾の見える和室で、ぶりしゃぶ&かにづくしで親睦を深めました。カニを食べながらではありますが、会話ははずみ、京都P発足当時の懐かしい話をしたり、近況を語り合ったりと心に残る時間を共有できたと思います。来年もぜひ・・・の声もたくさん聞かれました。

感想

仁風荘の夜はしょっぱかった　―空白の十五年―　　岩倉病院　相談室　　井上　幸久　さん

宮津の冬にしては暖かい日だったろう。でも夜の宮津湾は暗く唸り日本海特有の雰囲気を漂わせていた。外が寂しいと暖炉と灯りが恋しい。人も恋しい。仲のいい親戚が集まったような和やかさが心地良い仁風荘の一夜だった。しかし、一方地域生活支援センターからの報告は時代の変化と自らの停滞をいやほど感じさせるものだった。十五年程前、私達は、一乗寺近辺に退院している人を支えるため、月に二回病院から地域に出向いて『修二会』というささやかな取り組みをしていた。やがてその活動は、院内に出来た送迎付のデイ・ナイトケアに受け継がれることになり、『修二会』はページを閉じることになった。時を同じくして一乗寺の街からみんなの歩く姿が消えていった。私は『修二会』以来、地域を志向した新たな取り組みをしないままに十五年の日を重ねてきた。デイ・ナイトケアの出来たことによって地域へ向かうエネルギーやモチベーションを維持することが出来なかった私は、まさしく病院の人だったと言わざるを得ない。その間に地域の環境は大きく変貌を遂げていたのだった。カニもブリも美味しかったけど、心は妙にしょっぱかった。

あみの福祉会　障害者福祉センター　桃山の里　　前川　嘉之　さん

丹後での2回目の例会が開催され参加することができ、若い人たちと会話ができ大きな元気をいただきました。

特に、今回のテーマが「生活支援センターの今とこれから」という内容で、遅れている丹後地域にも峰山町において、2004年度生活支援センター整備事業が計画されており、今回の5ヵ所からの報告を聞かせていただき生活支援センターの意義の深さ、運営の在り方、またその困難さが具体的に解り大きな収穫でした。

トピックス

＊　京都市精神保健福祉ボランティア連絡協議会「風のリンケージ」が発足

(2月18日「発足記念式典・講演会」)

この会は、すでに京都市内で精神保健福祉の分野で活躍されていた6つのグループによって結成されました。

発足の目的は、①ボランティアグループがお互いに交流したり、情報交換しながら学びあう機会とする②精神保健福祉ボランティアの活動を多くの市民に知ってもらい、精神保健福祉の理解の輪を広げる③精神保健福祉ボランティアの養成・育成をする④地域での、精神に障害のある市民の自立と社会参加の支援を行うということだそうです。

会の名称である「風のリンケージ」には、精神に障害のある方にとってさわやかな風が吹くように活動していきたい、ボランティアの輪がつながり広がってほしいという願いが込められているようで、その願いが叶うことを願っています。

【問合せ先　京都市こころの健康増進センター相談援助課　TEL　075-314-0355　FAX　075-314-0504)】

＊　ACT(assertive community treatment　;　包括的地域生活支援プログラム)とは・・・・？

京都メンタルケア・アクションが「ACT」の実現をめざして活動を開始されました(2月21日[ACTを京都に！]フォーラム開催)。「ACT」って何でしょう？

「ACTとは、重い精神障害を抱えた人たちが、地域の住みなれた場所で安心して暮らしていけるように援助するプログラムです。30年前米ウィスコンシン州のマジソンで始まり、実証的研究によってその有効性が確認され、現在米国の 35州以上で、また、カナダ、イギリス、スウェーデン、オーストラリア、フィンランドなどで行われています。日本でも昨年から国立国府台病院でACT－Jとして思考されています。

ACTの特徴は、医療と福祉を包括した多職種チームによって、地域で生活する精神障害者に24時間365日にわたる質の高いサービスを生活現場で継続的に提供するというものです。」(京都メンタルケア・アクションのチラシより抜粋)

リレー職場紹介

通所授産施設「カメリア」

通所授産施設「カメリア」は、平成12年4月に開設いたしました。場所は長岡ヘルスケアセンター（長岡病院）より徒歩約5分、田園風景の広がるのどかな環境の中にあり、2階には地域生活支援センター「アンサンブル」があります。

H15年12月現在、16名の方（定員20名）が（月）～（金）まで通所され、ベーカリーシェフの指導のもと、パン・ケーキの製造・販売を通して、各自仕事に必要な習慣等を身につけるために頑張っておられます。

カメリアが開所してからもうすぐ5年目を迎えようとしています。毎日、個性（？）豊かなメンバーさんとの関わりの中で悩むことは多いものの、楽しくパン作りに励んでいます。

メンバーさんの共通の目的は「働く」ということであり、私たち職員もこのことを原点に日々メンバーさんと接しています。ただ「働く」という共通の目的をもっていても、それを達成するまでにある問題点や悩みは人それぞれです。

時には職員が感情のコントロールがうまく出来ない人の当たられ役になることもあります。また通所目的があやふやになっているメンバーさんと、何度も何度も話し合いをする時もあります。このような時わかりやすい具体的な目標を一緒に考えていく中で、どうすれば自分自身の力を伸ばしていってもらえるのか考える毎日です。カメリアでの体験を通して個々のメンバーさんが持っている力を伸ばし、その力を自分自身で認めていけるようにという思いでサポートしています。そしてそのことを通して自信を持ち、今後につながってほしいとの願いでいます。

「働く」という意味や生活の中での「仕事」は本当に様々です。たくさんのメンバーさんとの関わりの中で、その人にとっての「働くこと」・「その意味」を考えさせられることが多々あります。「就労支援（就職）」については、このようなことを十分に踏まえたうえで、関係機関との連携を図りながらメンバーさんの目的が果たせられるよう、進めていきたいと思っています。

３月例会の案内

3月の例会は、連携をテーマにシンポジウムとグループワークを行います。

医療と福祉の円滑な連携の必要性については誰も異を唱える方はいないでしょうが、現実にはなかなか円滑にはいっていないという話もよく耳にします。

疾病の治療から生活支援・就労支援までの一連の流れにおいて、利用者にとって使い勝手のよいシステムを構築するにはどのようにしたらいいか、連携現場の実情、そこで行われている努力・工夫、壁となる問題点・課題などを共通認識すると共に、そこから一歩でも二歩でも前進するためにできることは何か、みんなで考えましょう。

日　時　　2004 年3月 13 日（土）　午後 2 時～5 時まで
場　所　　京都府職員福利厚生センター
内　容　　シンポジウム　「どうなってる連携？ こうしようよ連携！」
シンポジスト　　山本　幸博　氏　　（共同作業所　ジョイントほっと　PSW）
　　亀海　聡　氏　　（三幸会　第二北山病院　　PSW）
　　粟津　佳子　氏　　（北保健所　精神保健福祉相談員）

掲示板

シンポジウム「高齢者虐待の現状とその防止」のお知らせ　　主催　京都弁護士会（Tel　231-2378）

日　　時　3月18日（木）18:30～20:30　　会　　場　京都弁護士会地階ホール（231－2378）
パネリスト　上田照子氏（流通科学大助教授）・水無瀬文子氏（寝たきり予防研究会）
　　池田直樹氏（日弁連：高齢者障害者の権利に関する委員会）
コーディネーター　尾藤廣喜氏（京都弁護士会：高齢者障害者支援センター運営委員会）

事務局からのお知らせ

新入会者　中田　　俊さん（奈良保健所）　　会員数　2 月 10 日現在　190 名

編集後記

「編集作業のたび、さまざまな人とのつながりによってきょうと通信が出来上がっていくのが実感できます。」（小野）
「小野さんや野元さんという若い力に支えられて完成しました。頼もしい限りです」（菅生）